

第三章 陰謀再び

『シュミットバウアー文書調査団』。帝国政府のいかなる公式文書にもその名称は記載されておらず、事情を知る極少数の関係者の間でのみの通称である。新帝国暦一年四月、この調査団はノイラント辺境星系の古称を持つフェール星系から、膨大な量の古書や文書を持ち帰った。いずれも、ゴールデンバウム王朝第二十七代皇帝、通称『亡命帝』マンフレート二世の時代のもので、多くが皇帝と彼の側近たちが持ち帰った、自由惑星同盟での出版物だった。

「自由惑星同盟における法制度や社会システムに関する研究書です。マンフレート二世陛下、そしておそらくは彼の側近グループは本気で帝国に自由惑星同盟の政治システム……つまり、民主共和制ですけれど、それを導入する計画だったのですよ」

キルヒアイスに対する報告の中、これら出版物の研究に当たるローザ・ローゼンマイヤー教授はそうコメントした。教授は帝立大学帝国中史研究室を主宰し、帝国中史の権威である。

「マンフレート二世の治世は一年に満たない、極く短いものでした。彼が自由惑星同盟に対して外交の門を開き、内政にも改革の手をつけようとしていたことは知られていますが、その具体的な内容についてはほとんど伝わっていません」

ゆえに亡命帝に関して発表された研究は、そのほとんどが僅かなかつ断片的な資料の上に組み上げられた仮説と推測の楼閣に過ぎなかった。『晴眼帝』の再来として、あり得た第二の帝国中興の

祖として賞賛する声の一方で、帝国の現実を直視せず、無理押しに民主共和制の導入を図って足許を掏われた『度しがたい理想主義者』として批判する勢力があるのも当然のことだった。

「そのいずれもがほとんど根拠のない、机上の空論同士で干戈を交えていた、と言われても仕方ありませんでした」

新たにもたらされた書籍、それらへの書き込みやノートと思われる文書の分量は、研究が数年以上、おそらくは一〇年近くにわたる長期にわたるものであり、思いつきや気まぐれなどと片付けられるレベルではあり得なかった。

「帝国の政治制度に対して、民主共和制をどう馴染ませるか、どの程度の期間をかけるべきかについても十分の研究がなされています。無理押しに、性急に民主共和制を導入しようとして失敗したという批判は当たらない……のではないかと思います」

『亡命帝』が暗殺され、彼の側近も中央を逐われた時、これらの文書とほぼ同じものが極秘のラベルを付されて帝国公文書館に収納された。しかし、現時点において公文書館には収納されたとした記録のみが現存し、肝心の文書自体は存在しない。廃棄、もしくは移動された記録もなく、その行方は謎だった。もし、シュミットバウアー文書が見出されなかったら、『亡命帝』とその側近たちの事跡が新たな光の中、歴史の表層に浮かび上がってくることはなかっただろう。新たに得られた貴重極まる歴史的資料の研究は、今後少なくとも一〇年余りは続くものとみられる。

「新たな帝国中史が書かれることになるでしょう」

ローゼンマイヤー教授の言葉を借りれば、それほどの意味を持つ資料の発見だった。

文書からの新たな史実の発掘、それは教授らの研究者に委ねる

として、キルヒアイスの関心はそれ以外の二点だった。一つが、彼の構想するローエングラム王朝の新たな統治機構である。

「皇帝陛下が永遠にご健在でありさえすれば、こんなことは考える必要はありません」

極秘裏に研究を命じたメンバーに対して、キルヒアイスは言い切っている。ラインハルトが不老不死であり、数百年にもわたって帝国に君臨してくれる保証さえあれば、彼は安んじて彼の臣下の一人であり続けられるのである。何も自由惑星同盟由来の文書を研究してまで、統治機構の研究などする必要はない。

「お前は俺が暴君になると思うているのか？」

研究のことを告げたときのラインハルトの反応は、直截に過ぎるとはいえ、正鵠を得たものと言える。ラインハルトという絶対的な統治者の存在にも関わらず、その権限を制約し、統治を代行するようなシステムの研究は、キルヒアイスが皇帝親政の否定を考えているかにさえ見えかねない。

「まだ、誰にも話すな」

ラインハルトからの忠告は、そうしたキルヒアイスが渡ろうとしている橋の危険さを物語って余りあるものだったと言える。

シュミットバウアー文書の研究が解きほぐし始めたマンフレート二世らの政治構想は、しかし、そうした危険性を伴うにしてもキルヒアイスにとっては朗報だった。帝政、あるいは皇帝専制以外の政治システムが喪われ、これらの政治制度が機能を失った際に代替すべき統治の方法論がゴールデンバウム王朝統治下の帝国には存在しなかったのである。

「……であれば、自由惑星同盟政府に対して支援を要請すればよいではないか」

この批評もあるが、現時点の帝国が皇帝ラインハルトの親政体制である以上、それを公式に否定するような動きは許されなかった。両国間に正規の外交ルートが開かれ、通商も開始されたとは言え、政治体制に関する情報の交流はまだ大きな制約を課せられている。時に皇帝の代理としてその右に立つ帝国大公にとって、場合によりその政治的な立場を犠牲に供せず、民主共和制の研究書の入手は極めて難しいのも事実だった。

キルヒアイス自身、まったく予想していなかったのが、ローゼンマイヤー教授の言う、マンフレート二世らによる『十分の研究』だった。まったく未経験のまま、手探りで探し求めていかねばならないと思われた、民主共和制。その種子を蒔き、苗から成木へと育て上げていくための手順が思いもかけずに入ったのである。キルヒアイスの志す、新たな統治機構の研究がこの時期に一挙に進んだのも当然のことと言えた。

当初、キルヒアイスは研究の完成に一年余りを見ていたが、現時点での状況を鑑みれば、その期間を半分以下に短縮できる可能性が高い。

そして、今ひとつ、キルヒアイスの胸裡に澱のように淀みこんでいる懸念は、シュミットバウアー文書とともに発見されていた、これも膨大な手記だった。ヤバシエスバビエル和紙紙と呼ばれる植物由来の古紙に、これも古い地球時代のインクインクの一種、シワフルツイング墨で手書きされた膨大な量の手記は、マンフレート二世の側近の一人、シュミットバウアー一族の一人の手になるものと推定された。

「おそらくはレオンハルト・フォン・シュミットバウアーでしょう。その名前は伝わっていましたが、今まで実在が証明されたことはありませんでした」

ローゼンマイヤー教授は言う。マンフレート二世の側近で名前が知られているのは当時のロートリンゲン伯爵当主の他はごく少数であり、マンフレート二世の亡命や帝国の帰還の時期、彼と共にフェザン回廊を往復した側近たちもほとんど名を知られていない。偏執的な執拗さで彼らの事跡を抹消したのは、マンフレート二世の後、玉座を襲ったウィルヘルム一世自身だとも、彼と彼の次に帝位に即いたウィルヘルム二世の治下、社会秩序維持局で辣腕を振るったジークマイスターだとも言われるが、これも定説はない。

『亡命帝』の時代に、さらに鮮烈な照明を浴びせることになったはずの手記は、しかし、永遠に失われた。文書を回収して帝都に向かう帰路、調査団は正体不明の敵からの襲撃を受けた。護衛に同行していたタウゼントシュタイン大尉やギレンセン大尉らの活躍で辛うじて文書の大半は難を免れたが、手記を載せた輸送車は自爆車両に突っ込まれて炎上し、数千枚を数えた ヤバシエパピール 紙の文書は一枚残らず灰燼に帰したのである。

キルヒアイスの懸念は、まさにこの正体不明の敵だった。後の調査により、襲撃者の衣服の一部から『地球は我が故郷、地球を我が手に』なる文言が発見され、公的には地球教徒が犯人とされている。

帝国政府の公的な見解はともかく、キルヒアイスは地球教徒はあくまで凶器に過ぎず、彼らを指弾して強行に走らしめた個人なり、組織の存在を直感している。その直感を裏づけるのが、喪われたはずのレオンハルト・フォン・シュミットバウアーの手記だった。

帝国大公執務室の個人金庫。キルヒアイス自身以外、誰も開くことのできない保管庫の中に、それは眠っている。彼の元副官であるタウゼントシュタイン大尉が生命がけでもたらししてくれた記憶

チップは大尉の直感通りにレオンハルトの手記の完全な電子的コピーを収めていたのだ。

帝国大公としての多忙さが、また手記全ての通読を許さなかったが、目を通した箇所の内容はキルヒアイスを愕然とさせた。レオンハルト個人の手記であり、内容の多くは彼の日常、亡命前の少年時代から、マンフレート皇子に伴われての亡命、自由惑星同盟での日々から帝国への帰還、マンフレート二世の戴冠など、ローゼンマイヤー教授ら帝国中史研究者にとって垂涎の的とも言つべき記事に埋め尽くされている。

キルヒアイスには帝国中史への興味は深くない。彼を驚かせ、フェール星系での襲撃事件に地球教徒が果たした役割に対して深刻な疑問を抱かせたのは、偶然にも目にした一節だった。

『亡命にあたり、改めて注意を受ける。リーゼル・アウグスタ……祖母の姉が自らの生命を以て皇帝陛下の盾となつた事跡、フロレンティア……祖母の兄の娘だったはずだが、皇后陛下の身代わりとして誘拐され、生命を喪つた件を例に引き、父曰く、吾々には敵がいる。シュミットバウアー個人の敵ではない。彼らは目には見えないが、陰謀を肥料とし、水として密かに根を宮廷に張り巡らせ、時に帝室にまで害をなすという。彼らは特定の貴族ではなく、貴族の仮面を被り、数年、数十年をかけても目的を果たそうとする。気をつける、お前のそばにいろのがまさにその『敵』かも知れない。決して気を緩めてはならぬ——と』

明らかにシュミットバウアー一族には、彼らが『敵』と目する何らかの個人、おそらくは組織が存在したことを、この手記は示している。キルヒアイスはそう考えざるを得ない。この『敵』が恐れたのは、シュミットバウアー文書を通じて彼らの存在が明らかにな

ることではなかったのか。だからこそ、帝国公文書館に密かに侵入してマンフレート二世の蔵書を抹殺し、フェール星系のシュミットバウアー文書に対しても執拗な攻撃を繰り返したのではないか。その前に、最後のシュミットバウアーと言われたコルネリア・ゲルトルーデとその兄ヨハン・クレメンツ。彼らはフェール星系を訪れるにあたって、その足取りを細心すぎるほどの注意を払って消し去っていなかったか。

シュミットバウアーの名は、キルヒアイスにとつても消しがたい記憶を伴っている。リップシュタット戦役、そして皇帝誘拐事件。その前のラインハルト暗殺未遂事件。『帝室に対してその身を挺せよ』とのルドルフの遺訓を抱いた彼らは、前後三度にわたってラインハルトとキルヒアイスの身を危うからしめた。キルヒアイス自身コルネリア・ゲルトルーデと二度の白兵を戦い、その鋭鋒には時に肝を冷やさずにはいらなかった。

それほどの鋭気と矜持を誇るシュミットバウアーが、あれほどまでの注意を払って文書の存在を伏せ続けねばならない相手が確かに存在するとすれば、容易ならぬ相手である。彼らの故知に倣って十分の警戒を怠らなかつたからこそ、調査団の大半は無事であり、タウゼントシュタイン大尉の機転のおかげとは言え、レオンハルト手記もキルヒアイスの手許に達することができた。彼らにたった一度の過誤があれば、一切は帝国公文書館の『亡命帝』蔵書と同じ運命を辿っていた可能性は低くないのだ。

そう考え、キルヒアイスは気づく。この『敵』はシュミットバウアー文書の存在を知っていた。彼に文書の存在を知らせたのはマリーンドルフ伯爵だが、伯爵もまた宮廷の噂としてそれを伝えに過ぎない。

その噂の出自は……戦場では恐れを知らぬキルヒアイスだが、さすがに背に冷たいものを感じずにはいられない。『敵』は噂の中に真実の一端を埋め込み、帝国政府と軍の力によってシュミットバウアー文書の所在が明らかにされた時点で、これを抹殺すべく地球教徒を動員した。彼が薄々感じていた、地球教徒の背後に蠢く存在こそ、この『敵』に違いなかった。

「フェザーンの黒狐……？」

帝国軍侵攻時に姿をくらませたまま、杳として消息の知れないフェザーンの支配者のあだ名をキルヒアイスは思い浮かべる。彼が何のために消息を絶っているのか、それも不明のままである。

エルウィン・ヨーゼフ二世を狙った皇帝誘拐事件、および自由惑星同盟に銀河帝国正統政府なる傀儡政権を成立させる根拠となった偽皇帝亡命事件、そしてその偽皇帝が刺客となったラインハルトの暗殺未遂事件。そのいずれにもルビンスキーの姿はない。しかし、舞台に現れた多くの登場人物が、意識するとせざるとに関わらず、黒狐の操り系の支配下にあったことは確実だろう。

「フェザーンと地球教……あるいは……」

キルヒアイスは思いつく。既に地球の地球教本部は数億トンの土砂の中に埋もれ、ワレーンの搜索によっても有効な情報は得られておらず、キルヒアイスの直感を裏づける証拠はない。だが、裏にフェザーンの存在を仮定し、彼らと地球教徒が結びついているとすれば、フェール星系での襲撃事件の説明もつく。

小さく唸り、キルヒアイスは読書器にかけたレオンハルト手記に視線を走らせた。紙数にして数千枚。最初の日付は、彼がこの手記……日記の最初の一ページを書き記したのが一〇歳にまだ何年か届かない年齢であったことを示している。以来、一〇数年にわ

たつて一日も欠けることなく日記は綴られている。その全てを個人で渉獵するのは、帝国大公として多忙を極めるキルヒアイスにとって不可能事に近い。

この手記は有用であると同時に極めて危険である。正体不明の『敵』は、おそらくまだ手記の健在を知らない。存在を察知したとすれば、フェール星系での事件を見るに、『敵』は手段を選ばず、手記を抹殺しようとしてくるだろう。

その意味で、真に危険なのは手記ではなく、この『敵』である。彼らを恐れて手記をキルヒアイス一人の手許に押さえておくのは本末転倒と言つべきである。リスクを十分に予測した上で、研究を公然化する。それが帝国大公たるキルヒアイスの義務である。

執務デスクの上に、キルヒアイスは手を伸ばした。

「ラーゼン中尉、頼みたいことがあります。執務室へ来て下さい」

ラインハルトが即位と同時に発した勅令の一つに『優れた資質を持つ技術者、職人は大いに優遇せよ』というものがある。

単に専門職人への待遇改善だけを意味するものではない。尉官時代、この金髪の覇者は、大学での専攻や本人の資質を無視して徴兵されてイゼルローン艦隊に配属され、無念の死を強いられる多くの兵士たちを目の当たりにしてきた。

「軍以外にあつて有為の人材を、軍に於いて無為に死せしむ。死に至らずとも、最も有為たるべき歳月を一介の兵士として浪費せしめるは、人材の損失である。人材は無限ではない」

自由惑星同盟のホアン・ルイは、人的資源委員長時代に社会インフラを支えるための人材として、四〇〇万人の将兵に対する徴兵

解除を提案し、当時の国防委員長ヨフ・トリューニヒトによって拒否されている。拒否の理由として示した、四〇〇万の徴兵解除が軍組織の崩壊につながる可能性については、史家の評価は二分している。四〇〇万すべてが軍の中堅を占めるわけではなく、有能な技能者がただ戦場の『埋め草』にされるためだけの最末端の任務に就かされている事例は数え切れないほどだった。一方で、そつした最下級の兵員といえども数百万人単位で前線から引き抜けば、帝国に対する戦線の維持すらおぼつかなくなるとの評論も存在する。

ラインハルトの指示に対して、軍上層部はともかく軍の中堅層、特に軍令にあたる統帥本部の中堅士官からは強硬な異論が起きたが、その内容は、この後者の論理と軌を一にするものだった。

後者の批評に対して、ホアン・ルイは一言で回答を与えている。

『では、戦争自体を止めるべきでしょう』と。そして、異論に対するラインハルトの回答も、奇しくもルイのそれをなぞつたものに近かった。

「自由惑星同盟に対する大規模な戦役は終結した。過去一五〇年における臨戦態勢をこのまま維持するとして、その兵力はいずこへ向かうというのか」

まだ完全に終わったわけではない。自由惑星同盟はまだ存在する。ヤン・ウェンリーも健在である。一五〇年続いた戦いが、僅か一回や二回の遠征で完全に終熄につながるはずもない……ラインハルトに対して正面からの反論は影をひそめたとはいえ、根強い囁きは実戦部隊、特に准将から中将にかけて、ラインハルトの登極に従つて頭角を現した若手の将官たちの間で根強かった。

「俺たちは運がない。ほんの少し皇帝陛下の幕下に属した時期が遅かつただけで、上級大将や元帥に上る道を塞がれてしまふなどとい

うのは、余りにも不公平と言つものではないか」

声があくまで水面下に留まり、公然とした新皇帝への批判として表面化しなかつたのは、ラインハルトの論功行賞の明快さと人事における公平さが誰の目にも明らかであつただろう。僅かに一時期、ヤンに対して二度の苦杯を喫しながら上級大将 同盟駐在高等弁務官の高位を手中にしたレンネンカンフへの批難が音量を高めた時期があつたが、これもレンネンカンフに対する皇帝ラインハルトの処分が明らかになると、ほどなく鎮静へと向かつた。

「治にあつて徒に騒擾を醸し、勅命を汚す。過誤の罪、免官に値するも、後日の功勞を以て予備役たるを贖つべし」

レンネンカンフに対するラインハルトの叱責は峻厳を極めた。上級大将から大将への降等と予備役への編入。それも、軍籍剥奪に相当するも、将来の功績を期待して予備役に留めるといふもので、一旦予備役に編入された将官が現役に復す可能性の低さを考えれば、いずれ『予備役を贖つに功なし』として免官命令が下るのは明らかだつた。

もつともラインハルト自身は免官までは考えておらず、健康を回復すれば、本来のレンネンカンフの資質に相応しい地位……教育總監部付き、あるいは士官学校教官などへの復職を考えていた節がある。結局、その後の状況の急変により、ラインハルトの真意が具体的な人事として示されることはなかつたのだが。

ともかく、レンネンカンフの処分は帝国軍の一部を覆いかけた不穏さは影を潜め、ラインハルトの勅命は徐々に具体化を見始めている。最初に着手されたのが高度な技術を有する専門技術者の徴兵解除や、本人の希望による上級士官への登用であり、彼らの保有技能評価の基準として、専門職人資格がリストに加えられた。

その余波と言つべきか、旧王朝時代とは逆にそうした有資格者の在籍数が組織の評価の目安と見られるようになり、その風潮は急速に帝国全土に及び始めている。ゴールドンバウム王朝末期には専門職人資格を取ると給与を引き上げねばならないことから、資格取得を希望する見習職たちへの受験推薦を渋つたり、資格取得する理由を構えて解雇する、あるいは有資格者を採用しないなどといった風潮が少なからずあつたが、そうした悪風は既に一掃されていた。

帝国暦四八九年の三月に専門職人の資格を取つたウジー・ザーネヘルシュテラーは、さらに半年プラントミユラーの店に勤めた後、帝都でも指折りの有名ホテルである、シュロスホテル・アム・カイザープラッツのメイン・ダイニングに採用された。師匠のプラントミユラーの推薦があつたことは言うまでもない。

時代が彼女に幸いしたと言つべきなのだろう。『神々の黄昏』作戦の発起から、ラインハルトの帝都凱旋、さらには新皇帝の即位など旧王朝の旧弊が一掃されると共に、帝都は新王朝の勃興に伴う祝賀行事が目白押しとなつたのである。

新たな職場に入つてから早くも一年半。ウジーは二三歳になり、次席パティシエの席を与えられている。給与も、本人の感覚ではプラントミユラーの店の時代とは比較にならないくらいの高給に上がり、今のところは順風満帆な人生と言つてよかつた。

「一八、九の頃は最悪だつたけどね」

ウジーには余り回顧癖はない。帝国でも辺境に数えられるラストエンテ星系出身の彼女にとつて、人生は顧みるものではなくて、先を先を見詰めていくべきものだつた。

その彼女にしても一九歳の時の同盟軍の侵攻作戦は、今でもし

ばしば魔^まれるほどの悪夢を彼女にもたらした。危^{あや}うく家族もろとも同盟領に連れて行かれそうになり、抵抗したウジィは同盟軍の兵士に、恢復するまでに三ヶ月余りかかるほどの重傷、ミハエルに言わせると瀕死の重傷を負わされた。

一八歳の時にミハエルと知り合ったきつかけも、帝都の貴族のどら息子に襲われて、こちらも危^{あや}うく右腕の自由を失いかけるほどの怪我を負わされたことだったから、ウジィの一八歳から一九歳は『最悪』の一言だったかも知れない。ただ、ウジィの精神^{こころ}はたまさかの悪夢など、もう軽々と弾き返してしまつほどに健康で強靱^{きび}だった。

「でも、ミハエルと知り合えたし、後遺症も何も残ってないし、結局、マイスター資格も取れたし、終わりよければ全て良し……でしょ？」

ミハエルには『ホント、ウジィのポジティブさ、見習いたい』とほやかれる始末だ。この年の一〇月にはもう四年越しの交際となる彼との結婚が控えている。

今、ウジィは帝都の最も繁華な市街地からは少し離れたアパートメントの一室に一人住まいである。引越^{ひき}越しに対して、帝国軍務省からの打診が入ったのは、新たな職を得たのとほぼ同じ時期だった。

それまでずっと、師匠のプラントミユラーの世話で入った、ベッドと小さな収納スペースがあるだけで、小さなキチネットやシャワールーム、洗面所などはフロアで共用という古いアパートメント暮らしだった。プラントミユラーの店の裏にあつて、日々の生活にも、職場に通つものにも危険が少ないというのだけが取り柄の、頑丈だが古いアパートメントだった。

「なんで帝国軍があたしにアパートを斡旋するんですか？」

不審がるウジィに、軍務省の担当官が答えたのが『キルヒアイス提督の副官の婚約者に万一のことがあつてはなりませんので』だった。

「え？」

不得要領のウジィに担当官は説明した。

「タウゼントシュタイン大尉はキルヒアイス上級大将閣下の主席副官です。その主席副官の婚約者が万一にも反帝国勢力……具体的に言つと、旧ゴールデンバウム王朝時代の門閥貴族であるとか、叛乱軍の指囃^{ささや}を受けた共和主義者のことになりましたが、彼らに拉致されたり、危害を加えられたりするよ^ような事態は起きてはならぬことですから」

「そうか、キルヒアイス提督って偉い人だったんだね。ミハエルってば凄いね。そんな偉い人の副官だなんてね」

担当官は、あるいはかなりのユーモアの持ち主だったのかも知れない。脳天気に感歎するウジィに笑顔で応じてくれたのだ。

「その婚約者も凄いのはありませんか。叛乱軍の侵攻に対して身を挺して帝国領を守った旨、表彰されておられるではないですか」

「あれは……だって、故郷^{ふるさと}を捨てられさせようになつたんだもの。必死だったよ」

「必死だったとしても実際に抵抗して重傷を負い、それでもなお人々に抵抗を訴えるなど、中々ではしません。大尉も見る目が高いということでしょうし、だからこそキルヒアイス閣下もあなたの住まいには十分の留意を払つべく、命令を下されたのだと思います」

「……わ、そうなんだ。キルヒアイス提督が……」

そこまで気を遣ってくれなくても……と恐縮しつつ、でも『拉致』だの『危害』だのはもう一八〜一九歳の時の経験だけで十分だった。

なにしろ、新たな職を得たのは嬉しいが、職場はうんと遠くなったのだ。フロントミューラーの店は決して危険な場所ではなかったが、公共交通機関の便がひどく悪かった。

軍務省から紹介されたアパートメントは帝都の中央市街の外れ、勤務先まで地下鉄^{ウンターバーン}で直通の位置にあり、建物の入り口や各階のエレベーターホールには監視カメラやガードマンが配され、十分の警備がなされているし、建物から出ることなく地下鉄^{ウンターバーン}のホームへ向かうことができる。

もともとはリップシュタット戦役でラインハルトに協力した貴族の所有物で、元帥杖を受けたラインハルトが、元帥府に勤務する士官クラスの家族を入居させるべく、借り上げたのだという。前の住まいに較べると面積で四倍以上もある豪華さ……というのはいくまでウジの主観であって、帝都にあつては立地や設備の質はともかく広さとしては帝都では平均以下のアパートメントである。ラインハルトは彼の部下やその家族が、ローエングラム元帥府所属のゆえをもつて過度に優遇されるのを好まなかった。

「どうしてあたしだけ、こんな風に優遇されるの？ それってミハエルとかキルヒアイス提督のおかげかな？」

聞いてみたが担当官は首を振った。帝都詰めの帝国軍全士官とその家族に対して同様の配慮がなされているという。

「主に警備面で、です。主に単身の居住を余儀なくされている軍政府の関係者の子弟や、あなたのような軍関係者の婚約者といったところですよ。こつした人々が帝都中に分散して住んでいると警戒も

しづらいし、警備にかかる金も馬鹿にならない。それなら近い範囲に集めてしまつて、集中的に警備する方が効率的だということです」

担当官の注釈はともかく、ウジにとつて嬉しかったのは、かなりの広さの、それなりに設備の整つたキッチンが付属していたことと、婚約者であるミハエルの住む、単身の帝国軍士官舎が数ブロックしか離れていないことだった。理由は……まあ、婚約者をもつ若い娘にとつては言つまでもないことだろう。

ミハエルと結婚すれば、彼共々、今度は家族のある士官用の官舎に移ることになるのだから、このアパートメントもそれまでの住まいと言つことになるのかも知れないが、移つて一年余り。すでに彼女の体温を反映した暖かみを帯びた室内は、ウジにとつて捨てがたい愛着を覚えさせるものになっていた。

その日のウジも多忙だった。皇帝ラインハルトによる、レンネンカンパ上級大将对する処分が発表される一方、そのレンネンカンパを失脚に導いた事件について、シュタインメッツ上級大將が同盟政府に対して発した期限付き回答要求についても、速報が流れていた。表面、平穩な中にもどこか落ち着かない、水面下に巨大な騒擾を抱えているような、そんな空気をウジも感じていた。

勤務中、ウジは厨房を離れないのが普通だが、客に呼ばれてレストランの席に向かうことも少なくない。仕事に集中しているときに割り込まれるのは迷惑には違いないが、自分の仕事に対する評価を直に客から聞くことのできる貴重な機会を、ウジは決して逃さなかった。

「近いうちに新たな出兵があるかも知れないな」

そんな囁きを聞いたのも、『このデザートを作ったパティシエに挨拶しておきたい』という客に呼ばれた時だった。はっとして耳を澄ませたが、ざわめきに紛れてそれ以上の意味のある言葉を拾い出すことはできなかった。

微かに胸の裡がざわつくのを押さえきれない。ミハエルはキルヒアイス提督副官職を解かれている。軍大学受験のためだが、皇帝の親征のような大規模な出兵があれば前線への動員を免除されるというものでもない。キルヒアイス提督には新たな副官が付いたと聞いているし、ミハエルがもっと危険な前線に配されないとも限らない。

そこまで考えて、ウジィはミハエルの合否判定が出るのが今日であることを思いだした。先日、最終面接の後で電話したら、ほとんど気絶しかけていて、辛うじて電話相手がウジィだと気づいただけだった。よっぽど絞られたらしい。マイスター試験の時、終わって帰宅した後は食事も摂れずに爆睡に陥って師匠を心配させた自分を思い出し、ウジィは笑いをかみ殺す。

「そうだよ、ミハエル。何だってそんな簡単じゃないもの」

あとでもう一回電話しなきゃ……と脳裡のメモに書き込む。ミハエルのことだから、合否いずれの結果だったとしても連絡はしてくれるだろうけれど、できれば合格の声を聞きたいのは当然のことだ。自分の婚約者、もう間もなく『夫』と呼ぶ人のことなのだ。失敗を願うはずはないではないか。

副官職からの解任と待命状態への編入に際して、キルヒアイス提督は『落ちたらそのまま予備役編入です』とミハエルに告げたらしい。キルヒアイス提督らしい激励なのだろうが、ミハエルは二〇

代で帝国大公の副官を勤めるほどに有能な士官である。もし、新たな出兵があるならば、予備役編入どころか、そのまま前線指揮官に抜擢されてしまい、何年も帝都に還ってこないなど普通にありそうだった。

「じゃあ、ロートリンゲン伯爵家を嗣いじゃえば？」

ひよんな経緯からミハエルの後見人となり、ウジィの保護者の一人となっているのがマリア・アントニア・フォン・ロートリンゲン伯爵夫人。既に八〇歳の坂を超えた老貴婦人だが、先日もミハエルと一緒に何とか言う辺境星系に『調査旅行』とやらに出かけたと聞いている。ミハエルを気に入っていて、彼にロートリンゲン伯爵家を嗣がせるつもりらしい……とある人に聞いた。

「落ちたら、それでもいいじゃない。ミハエル・タウゼントシュタイン・フォン・ロートリンゲン伯爵って中々良いって思うよ」

冗談半分のウジィに、あの時ばかりは温厚なミハエルがあらさまに嫌な顔をしたのを覚えている。

「じゃあ、ウジィはウルシュラ・フォン・ロートリンゲン伯爵夫人になるんだぞ」

「えーっ！ あたしが伯爵夫人!?……」

言われるまで考えたこともなかった。

「ないない、絶対にない。それだけはない、あり得ない！」

からかったつもりが逆にからかわれて懸命に否定する羽目になった。本当に冗談ではない。一九歳の時の同盟軍侵攻事件、あの時にウジィの一家は帝国騎士^{ライプツァー}号を授与されているのだが、フォン・ザーネヘルシュテラーを名乗る気などさらさらなくらいなのだ。伯爵夫人だなんてとんでもない。

「あなたがフロイライン・ザーネヘルシュテラー？」

綺麗な人だな……と思った。定規で引いたように真っ直ぐな黒い髪、帝国では珍しいほどに艶のある漆黒の髪が肩から背に長くかかっている。余り日に焼けたことがないらしく、透き通るように蒼白い肌は、やや不健康な印象を与えるが、掘りが深くて小作りな顔の中で、驚くほどに大きな黒い目が印象的だ。ひどく若く見えるが、年齢はおそらくウジーより何歳か上、二〇代後半から三〇代にかかったくらい。

「ウジーとお呼び下さい、フロイラインなどとお呼び頂けるような身分ではございません、フラウ」

フロイラインなんて柄じゃないや、などとは続けない。職場で地を出してしまつほど、今のウジーは迂滑ではない。フロイラインと呼びかけるか、フラウと呼ぶか、判断に迷つところだったが、おそらくは既婚者、とウジーは見込んだ。

「新王朝の時代では、身分を云々する必要などないと思いますよ。でも、あなたがそう望むならウジーと呼ばせて頂きますね……私はフロレンツィア・フォン・マイヤーハイム。フロレンティアと呼んでいただいてよろしくてよ、ウジー」

「と、……とんでもないです、フラウ・マイヤーハイム。お名前を呼び捨てだなんて」

フラウと呼ばれたことを客は否定しなかったし、テーブルの上を確認して、ウジーは小さく安堵の息をつく。デザートの皿は綺麗に空になっていた。この機嫌を損ねての呼び出しではなさそうだった。「大変に美味でした。ありがと、ウジー。ここへ来られたのは幸運でした」

デザートの味について、二三のコメントが続く。ウジーを驚かせたことに、彼女が僅かに『今日はあそこがちょっといいちだったな』

と思った。無難、客の言葉にウジーを批難する意図は欠片ほどもなかったし、たとえ言葉の形をした批難と罵倒の針の束を投げつけられたとしても、ウジーはすべてを聞き取るつもりだろつ。

「……このシェフに聞きました。あなたはキルヒアイス元帥と面識があるのですか？」

質問ではなく確認だった。またか……と、これだけはちよつと内心に舌打ちしたい気分になるのはいつものこと。ミハエルがキルヒアイス提督の副官だったこと、その縁なのかミハエル経由でキルヒアイス提督にびつくりするような量の焼き菓子の調達を頼まれたことがあること……などのエピソードから、いつの間にか周囲が誤解するようになったのだ。そして、この言葉を吐く客のほとんどが『キルヒアイス提督に紹介してもらえようなんてはないか』。そこまで露骨ではないが、ウジーの職人としての腕よりも、キルヒアイス提督とのコネクションに興味を示す客は少なくない。

「見習い時代に、ケーキをお届けしたことがあります。ケーキを受け取って頂いて、伝票にサインを頂いた、直接にお会いしたのはその程度です、フラウ」

「あら、そうなの？」

小さく白い微笑。微かな違和感にウジーは眉を顰めた。何か、背中をさつと冷たい手で撫でられたような気がする。

「あなたが良い腕のパティシエであることは、私が自分自身で確かめました。キルヒアイス提督と面識があるつとなかうと、あなたの腕とは何の関係もないことですものね」

微笑が深くなり、ウジーも思わず頬を綻ばせて頷く。一瞬の違和感のはかき消すように失せていた。

「また来ます。その時は別のメニューもきつと頂くわ」

体重を感じさせない身体の動きで立ち上がると同時に、客はウジの掌に小さく折りたたんだ紙幣を滑り込ませた。

「あ、あのフラウ……」

「少なすぎるかしら？」

慌てて確認する。一〇〇帝国マルクの紙幣。少なすぎるどころか、パティシエ個人に宛てたものとしてはそうそうは見られぬ額のチップであることは確かだった。

「い、いえ……あの」

「では収めてくれるかしら。それと少し聞かせて。時間は大丈夫？」

半瞬——大きな黒瞳がさらに大きくなり、視界の半分をも占めたような錯覚。頭の芯に軽い痺れのようなものを感じて、ウジは思わず目を閉ざして頭に手をやった。

「どうしたの、大丈夫、頭痛かしら？」

「え……いえ」

痛みは一瞬に消え、それがあつたことさえもう感じ取れない。目の前の貴婦人は何事もなかったように穏やかな微笑のままだった。

「は、はい、フラウ、あと一〇分くらいなら」

柔らかな華やかな笑いを浮かべ、黒髪の婦人は彼女の隣席を指示した。

「……で、何を頼まれたんだ？」

ミハエルに問われるまで、ウジはその婦人からの話を綺麗に忘れていた。スケジュール帳には書き込んでおいたから、そのまま失念してしまう恐れはなかったが、彼女にとっては大して珍しく

もない依頼ではあつた。

「お祝いのケーキをあたえたいんだって」

『合格した』——ミハエルからの連絡はたった一言、それだけだった。帰りに訪ねても良いかとの折り返しに、即座に『待つて』と返ってきたから、これは素っ気ないというよりもそれ以外に言葉の選択を見いだせなかったに違いなかった。

職場にも話は通っていたので、その日は早めに引き上げさせて貰い、途中、何点かの買い物を済ませると、ミハエルの住む单身士官用の官舎前で地下鉄^{ウンターバー}を降りた。

話題が黒髪の女性客に移ったのは、彼らにしてはやや贅沢なピンテージもののワインで祝杯を上げ、食事と雑談に時計の長針が一回りするほどの時を費やして後のことだった。

「誰に？」

「知り合いの大学の先生なんだって。ヘマをして左遷されてたんだけど、お咎めが解けたんで帝都に還ってきたんだって言ってた。何か一〇年くらいぶりくらいだし、ちょっと驚かせてやりたいから、できるだけ大きいのを頼むって」

「それってウジ個人で受けるの？」

「冗談、もうブランドミューラーさんちの見習いじゃないんだし」

艶やかな金褐色の髪を大きく左右に振り回してウジは笑う。話を聞いた後、支配人に来て貰い、レストランへの依頼という形にして貰った。それが普通だ。ただ、ケーキの調製に当たるパティシエとしてウジが指名されると言うだけのことだ。

「一つだけ、変わったのが、出来上がったなら直ぐにあたしに届けに欲しいって」

「届け先で仕上げでもするのか？」

「普通のケーキだよ、全部仕上げてからパッケージングするに決まってるし、あたしが厨房を外さなきゃならないから、その分の費用も追加で頂くことになるって話になったんだけど、それで良いって」

腕の良い次席パティシエに二時間近く外されると、レストラン側もその間の人の手配が大変になる。追加費用はかなりの高額になるが、それでも良いのかという支配人の示した数字に、件の婦人も幾らかは驚いたような表情を見せていた。

が、彼女がそれで申し入れを引き下げると言うことはなかった。一瞬の驚きを直ぐに肌の下に押し込め、表情を改めた。どこか悪戯を企むお転婆娘……自分のことを棚の上に盛大に放り上げておいて、ウジィはそんな印象を持った。

「宜しいですね、この内容でお願い致します。期待していますから、是非、よろしく願いますね」

あれは旧貴族の、それもよっぽど羽振りの良い家門のご婦人だろう……着手料と称して、彼女が費用の半金を現金で支払って立ち去った後、支配人は肩を竦めて彼の推測を披露して見せた。そのヘマをした大学の先生というのは旧王朝時代の派閥争いに負けて、左遷の憂き目を見た件のご婦人の幼なじみか誰かに違いない。

「なんで幼なじみって分かるんですか？」

訝しむウジィに、支配人は簡単な推測だと応じた。彼のご婦人は、どつ見ても三〇を幾つも超えているように見えない。おそらくは二〇代後半、行っていて三〇歳になったかどうかくらいだろう。学内の派閥抗争が一〇年前だったとしても、抗争はその前から始まっていたはずではないか。一〇数年前と言えは、あの貴婦人としてまだ一〇代前半の少女の年齢である。

「つまりはご一門の若者か、それともお家で目をかけていた若い学生で、あのご婦人とは幼なじみ……ウジィのケーキで歓迎してもらえるのはそういう人物だろう」

まさかにも男女の関係があつたとは言わないが、憎からず想い合う仲であつたかも知れないではないかと考えれば、やや奇矯にも想える依頼も納得できるというものである。

そんなものなのかな……別に納得したわけでもなかったが、強いて反論も浮かばなかったから、奇妙な依頼主に対する議論はそこで終わりにした。ウジィも、支配人も決して暇ではなかった。新皇帝の時代は彼らに微笑みかけてくれている。受ける側の努力を欠けば、時代の好意が瞬時に移ろつてあるつことを彼らは誰よりもよく知っていた。

二人の間でそれ以上、この依頼が話題になることはなかった。帝国軍は軍大学への合格者に対して祝賀に名を借りての必要以上の懈怠を許すほどに寛容ではなく、ウジィの仕事の多忙さも決してミハエルのそれに劣るものではなかった。

「じゃ、もう一度、合格を祝して、それとミハエルの成功を祈って乾杯！」

ワインの最後の一杯を重ね、熱い抱擁とキスを交わした後でウジィは帰宅を告げる。若い二人にとつてやや残念なことには、帝国軍の単身士官用官舎は、極めて潔癖な規定……たとえ婚約者と言えども午後一一時には退出が義務づけられている……に縛られている。

もっともラインハルトは帝国軍や帝都を修道院にするつもりなど全くなく、この規定も旧王朝時代からのものである。規定なり法律なりが実情を反映せず、人々の日常に軋みをもたらす場合、旧王

朝ではそれらが無視され、あるいは有力者とのコネが優先された。新王朝では規定や法律が旧弊に墮したとして破棄され、改訂される。両王朝の、現時点での、最大の違いがそれであった。そして、単身士官用官舎での規定は、今のところ現実に反するものとは見做されていなかった。

「これはどういうことだ……」

人の抱いた感情を示す表現としてしばしば『オーラ』なる用語が使われるのを、ドミニク・サン・ピエールはこれまで陳腐な言い回しとして蔑如の感覚しか持たなかったのだが、この日は違っていた。見慣れた浅黒い禿頭、彼女の情夫ににして帝国軍からの逃避行を共にするアドリアン・ルビンスキーの頭部の周辺が、黒く揺らぐのを確かに見たと思ったのである。

帝国軍の侵攻に際して、彼らがフェザーン市地下深くの地下シェルターに難を避けてから、すでに一年と三ヶ月余りが経過している。この間、彼らがフェザーンの地表に出たことは一度もない。シェルターの住民は一〇指に満たず、終日互いの姿を見ることなく送れるほどの広さを持ち、天上もまた地球時代の教会建築内部を思わせて意識的に高く取られ、地下であることの圧迫感を避けている。食糧は無論のこと、嗜好品から、不足勝ちになる運動のための施設にも不自由することなく、ARを応用した擬似遊歩道までが完備されており、地表に出る必要性は全くなかった。

この一五ヶ月間、無論、ルビンスキーが無為に人生の休暇を楽しんでいたわけではない。フェザーンの地下奥深くにあっても、彼の目と耳は帝国と同盟双方を覆つように広がり、人々の動静をリア

ルタイムに捉えると共に、復権に向けた犀利な陰謀の網を人類社会に広げ続けていたのである。

そのルビンスキーに、ドミニクをしてオーラの実在を錯覚させた怒気を発させたのは、この日、帝都から入ったばかりの報告だった。

「何が起こったの、アドリアン。怒鳴るなんて、あなたらしくないわね」

「……」

常にあらゆる問いに対して回答を用意しているのがルビンスキーだった。そのルビンスキーが沈黙を以て応じたのに、ドミニクは再び驚きの目を睜り、男が凝視するスクリーン上に視線を移した。「なに、これ。バウアーシュミット准教授、帝都に無事到着。この医者、消してしまっんじゃないかったの？」

「……ああ」

余程の不本意を押し隠しているらしく、ルビンスキーの応答は低く、短い。

「二度、襲撃させた。ランメルスベルグのバウアーシュミットの仮住まいに、帝国軍からの出迎えを装わせてサイオキシンの末期中毒患者を向かわせた。念のために、駆逐艦を偽装させ、客船こと撃沈するよう手も打っておいた」

「どつちも外れた……のね」

「……ああ」

再び不本意そうな応答が続く。ランメルスベルグ星系でルビンスキーの手先を出迎えたのはバウアーシュミット医師本人ではなく、帝国軍特殊部隊の士官だった。手先は一人ではなく、一〇名を数えたのだが、帝国軍は既に特殊部隊一個小隊をバウアーシュミット

宅の近所に待機させていた。

重度のサイオキシシン中毒に冒されていた手先たちは、彼らとの間で戦闘が始まると間もなく『新皮質変質症状』による、いわゆる『獣化症状』を発症した。この症状に襲われると中毒患者は人としてのリミッタを外された状態、自らの筋力で自らの肉体を破壊してしまふほどの身体能力を発揮する状態に陥る。この状態を、地球教では『狂戦士モード』と呼んでいた。

重度のサイオキシシン中毒患者に、稀に『狂戦士モード』に類する症例が現れることは、帝国でも同盟でも広く知られていた。脳組織が完全に変成してしまい、鎮静剤や他の麻薬すら効かなくなる。もはや治療の手段も症状軽減の方法はないとされ、安楽死が適用された例も少なくない。

この段階の中毒患者を、消耗前提の戦闘員、あるいは暗殺者に仕立て上げようとした地球教徒のの発想は、まさに悪魔のそれと称せざるを得ないだろう。この四月のワールン艦隊による地球教本部攻撃でも、数十名の『狂戦士モード』の中毒患者が戦闘に動員された。ただ、地球教徒幹部の期待に反したことは、鋼鉄とセラミックの怒濤となつて押し寄せた帝国軍装甲擲弾兵の大軍の前にはなすすべもなかった。

とは言え、一〇名もの刺客の内、数名がこの症状に陥れば、撃たれても撃たれても立ち上がってくる中毒患者を前にしてまともな兵士ならたちまち恐慌状態に陥るはずだった。そうなれば、完全武装の一個小隊が一個中隊でも制圧に造作はない……はずだったのだが、待機していた帝国兵は問答無用だったという。質問も拘束もなく、いきなりの発砲。『獣化症状』を発症した信者も、まだ発症していなかった者も数重もの射線に縫い貫かれ、抵抗の機会すら

なかった。

さらに帝国軍の臨検を装った偽装駆逐艦だが、遭遇した目的の客船を前に啞然とするしかなかった。辺境艦隊から巡航艦一隻と駆逐艦一隻、さらに防禦シールド艦を加えた三隻の艦艇が護衛にしていたのである。

こと破れたりと察した偽装駆逐艦の船長はそのまま客船へ突進し、主砲斉射を加えたが、投擲されたエネルギーの槍は防禦シールド艦の中和磁場に弾き返され、自らは帝国軍駆逐艦からの雷撃を受け、火球とともに四散した。

「医者一人にここまで護衛をつけるなんてねえ……これは帝国大公の差し金ね」

「俺が、帝国大公に読まれたと言つのか？」

「読まれてないって思つてたわけ？」

揶揄と冷嘲、僅かな落胆と失望。ドミニクの表情も声も複数の感情の複雑なカクテルだった。

「なに？」

「決まっているじゃない。帝国大公はこの医者に帝都に戻ってきて欲しい。あの帝国大公がなりふり構わずになるとすれば、皇帝ラインハルトのために決まっている。キルヒアイス帝国大公にとって、皇帝ラインハルトは帝国そのものと引き替えても良いくらい、かけがえのない存在に違いないわ」

「……」

小さく唸り、ルビンスキーは浅黒い肌に浮かんだ怒りと不快の皺を深くする。その肌が動物的なほどの精悍な艶を失い、露わなほどの疲労と、微かな病的な色合いさえ帯びているように見えた。

「医者一人や二人片付けるくらい、あなたにとっては小指の先を

動かすくらいの仕事だったはずね。だから、いつものように小指の先で片付けようとした。それが大きな間違い。私が言いたいのはね、あなたが帝国大公の覚悟を読み違った、その読み違いに気づいていなかったってこと。前のあなたなら気づかない筈はなかったのに」

情人に向けた一瞬の氣遣わしげな視線を拭い去り、ドミニクの口調が辛辣さを増した。

「命取りになるわよ」

「そんなことは分かっている……」

「じゃあ、『ヴォルフスフント』と連絡を取ったらどうなの」

「なに……？」

「詳しいことは知らないけど、その道の専門家でしょ。パウアーシュミット医師はもう帝都に入ってる。帝都の地球教徒はもうほとんど一掃されているでしょうけど、『ヴォルフスフント』なら、まだなんとかできるんじゃないの？」

「それは……」

頷きかけたのかも知れない。縦に動きかけた逞しい首が不自然に途中で止まり、それからゆらりと逞しい顎を左右に動かした。

「無用の心配だ、ドミニク。パウアーシュミットを葬り損ねたとして、大した手違いでもない。所詮はただ一介の医者に過ぎん。肝心なのは、皇帝ラインハルトをして、目前の状況に手一杯にさせることだ。奴の叛徒は拡大の一途を辿っているが、その反面で空洞化も進んでいる。今はまだ静観を決め込んでいるが、いずれ帝国大公なりロイエンター元帥なりを同盟領に派遣して事態の收拾を図らざるを得なくなる。近くにいてこそ皇帝にとっては腹心の部下たちだが、一旦、一万光年の余の距離を隔てた際、彼らが皇帝に対して忠誠心を全うできるかどうか……だ」

「全うしていても、あなたが色々と煽りを入れるでしょうしね」

キーを何度か叩き、ルビンスキーは別の情報をスクリーンに表示させる。フロイデン山麓に新たに完成した『某伯爵』の居館を報じる帝都の新聞記事である。

「これが何だっけ言うの？ 某伯爵領って、未だにこんな贅沢のできる貴族が帝都に残っていたなんて驚きね」

「某伯爵……すなわち、グリューネワルト伯爵夫人、つまりは皇帝ラインハルトのお美しい姉君のことだ」

「本気なの？ 医者の一人も消せないくせに、皇帝ラインハルトの姉君に手を出せるのも思っているの？」

「実際に手を出す必要はない。そのような暴挙が企てられたという事実が重要なのだ。姉を害された、あるいは害されそうになったとなれば、英雄も名君も消え去って激情家の孺子だけが残る」

「自分が病だと言われても、おちついて治療を受けようなどと言う気にはならなくなるし、その方が御しやすいかと？」

「少なくとも逆上する以前よりはな……」

「そう上手くいくのかしらね。グリューネワルト伯爵夫人が帝都を離れると言っても、どうせ皇帝も帝国大公も十分以上の警備を施すでしょうよ。それでも思っているのはかりごとを巡らせることができるって本気にあなた、考えているわけ？」

「まあ、任せておけ……俺の手駒が地球教徒だけというわけではないことは、お前も知っているだろうが」

疑わしげな目で、ウィスキーのグラスを口許に運ぶルビンスキーの姿を見詰めていたドミニクは、不意に興味を失ったように身を翻した。

「空元気で虚勢でも、そうして自信満々の振りを装っている方が

あなたらしいわね。できれば、さっきみたいな怒鳴り声は上げないでくれるよう気をつけて欲しいわ。万一にも、あなたの思っ通りにことが運ばなかったとしても」

辛辣な呟きを残して立ち去った愛人の後ろ姿を、ルビンスキーは無然と言つよりも無表情な視線で追つ。その姿がドアの向こうに消えるとグラスを取り上げ、新たなウィスキーを注ぎ入れた。大きくグラスを傾けた精悍な浅黒い顔が、隠し切れぬ苦痛に歪む。小さく唸り声を上げ、机の引き出しの奥から錠剤の入った小瓶を取り出す。

「……思っ通りに行つてくれなければ困るのだ」